

「本誌特写」の展開

たじまなつこ
田島奈都子

(青梅市立美術館 学芸員)

創刊当時の『キネマ旬報』は、ページ数も少なく、いつまで続くかわからない同人誌的な存在であった。しかし、映画自体が市民の娯楽として定着してくると、誌面もそれに伴って拡充されるようになった。

さて、今回取り上げるのは、1932年10月1日発行の『キネマ旬報』第449号に掲載された《入江たか子の肖像写真》(図1)である。挑発的なポーズと表情が印象的なこの写真は、キネマ旬報社が満を持して撮影・掲載したらしく、わざわざ「本誌特写」と銘打たれている。

戦後の入江は、良くも悪しくも「化け猫女優」として知られたが、戦前の彼女は、時代劇から現代劇まで幅広く出演した人気女優であった。しかも《入江たか子の肖像写真》(図1)が示すように、ずば抜けた美貌を誇り、写真撮影当時ようやく20歳になったばかりだったにもかかわらず、独特の妖艶さも兼ね備えており、その様子を如実にとらえたこの写真は、写真家にとっても「会心の出来栄え」であったと思われる。ただしそれゆえに、この1枚はその後意外な展開を見せることになった。

残念ながら、戦前期の日本における著作権意識は全般的に緩く、他者によって描かれたポスターや撮影された写真が、他の作品に翻案とされることが、少なからず存在した。また、それと同様に肖像権もあいまいで、何らかの目的のもと、本人も了解して撮影された写真が、部分的に切り取られて別の用途に流用されることも多く、予期せぬ使用に涙を流す女優もいた。

翻って、そうした中での《入江たか子の肖像写真》(図1)は、1933年3月21日発行の『満州日報』夕刊3面に掲載された《キッコーマン醤油》(図2)、同年4月21日発行の『東京日日新聞』朝刊6面に掲載された《ニキビに顔剤 ユキワリミン》(図3)、同年12月発行の『映画と演芸』第10巻第12号に掲載された《古代アズキ洗粉》(図4)、1934年1月8



図1：《入江たか子の肖像写真》
『キネマ旬報』第449号、1932年10月1日発行



図2：《キッコーマン醤油》
『満州日報』1933年3月21日発行、夕刊3面



図3：《ニキビに顔剤 ユキワリミン》
『東京日日新聞』1933年4月21日発行、朝刊6面

日発行の『大阪朝日新聞』朝刊10面に掲載された《志らが赤毛染 るり羽》(図5)、同年11月10日発行の『大阪毎日新聞』朝刊3面に掲載された《『日の出』十二月号果然大売行》(図6)に部分利用され、最後は1935年頃の《サクラビール》(図7)に翻案とされた。

「本誌特写」であった《入江たか子の肖像写



図4：《古代アズキ洗粉》
『映画と演芸』第10巻第12号1933年12月発行



図7：《サクラビール》
1935年頃
(株)サカツコーポレーション所蔵



図5：《志らが赤毛染 るり羽》
『大阪朝日新聞』1934年1月8日発行、朝刊10面



図6：『日の出』十二月号果然大行
『大阪毎日新聞』1934年11月10日発行、朝刊3面

真》(図1)が、どのような経緯や条件で、他社の広告に利用されたのかは不明である。なかでも、化粧品の広告に、美人で鳴らした入江を起用すること自体は、基本的に相性がよいものの、《古代アズキ洗粉》(図4)が掲載された『映画と演芸』は、東京朝日新聞社が編集発行する映画専門誌であることから、『キネマ旬報』にとっては完全なライバル誌に当たり、そこに自社が撮影した写真を部分利用した広告が、掲載されたということは、誇らしいような、喜んでばかりもいられないような、複雑な気分になっ

たものと思われる。しかし、この事象はそれだけ当時の入江が、自ら独立プロダクションを起こせる売れっ子女優だったことのみならず、この写真が多くの人を引きつける、魅惑的な作品だったことを物語っており、その点では写真家冥利に尽きる展開ともいえよう。

ちなみに、サクラビールの製造販売元であった帝国麦酒株式会社は、1912年に設立された比較的后発のビール会社である。純ドイツ式を「売り」にしていた同社は、横浜や神戸と並ぶ国際貿易港であった北九州の門司を拠点にしていた関係から、戦前期には近隣アジアを中心に輸出にも力を入れ、国内外でそれなりの販路を持っていた。しかし、1939年に大日本麦酒株式会社に吸収合併され、戦後は同社の解体とブランド再編のあおりを受け、戦前期のような全国区ブランドとして復活することは叶わなかった。このため、サクラビールの往時の繁栄は、ポスターのみが物語るといっても過言ではなく、当時のトップ女優を主題にした《サクラビール》(図7)は、奇しくもそれを表す資料となっている。